



女學生だったわたし：張愛玲『同學少年都不賤』における回想の敘事

濱田，麻矢

(Citation)

日本中國學會報, 64:283-298

(Issue Date)

2012-10-08

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001775>



女學生だったわたし

——張愛玲『同學少年都不賤』における回想の敘事——

濱田 麻矢

一、『同學少年都不賤』の問題點

張愛玲（一九二〇～一九九五）が二〇世紀の中國語文學で最も影響力を持つ作家の一人であることはもはや疑いを容れないだろう。しかし、張愛玲の後期作品についてはまだ評價は定まっていない。從來、張愛玲が一九五二年に渡米した後、活動の重點は舊作の書き換えや翻譯におかれ、小説の創作は寥々たるものであったと考えられてきた。しかし今世紀に入ってから、未發表原稿が續々と發見及び出版され、張愛玲が小説創作を堅持し續けていたことが明らかになっている。本論では、没後發表された小説の一つ、『同學少年都不賤』（以下『同學』と略稱する）^①をとりあげて、そこに描かれた女學生生活とその敘事について検討してみたい。

張愛玲再評價の先驅けである夏志清は『同學』をこう評している。「このテクストは簡略に過ぎるようだ。考えるべきことはふたつある。一つは小説が中高生の生活を描いているという點。以前には書いたことがなかったテーマを書くというのはなかなかのことだ。もう一つはアメリカに渡った後、張愛玲のSEXに對する考え方が變ったと

いうことだ。小説に女學生たちの同性愛傾向が書かれているのは注意に値する。當時張愛玲は寄宿して通學生ではなかったから、このようなことも経験しえたであろう」^②

本論は、まさに夏氏の言う「考えるべきふたつのこと」について明らかにすることを目標とする。そのためにまず『同學』前後の張愛玲の後期創作をまとめ、晩年の張愛玲が自分を語ることに強い思い入れを持っていたことを明らかにする。次に女學生をテーマにした民國期テクストの系譜を整理したうえで、張愛玲における女學校物語の特徴について考えたい。さらに「性（身體）」や「同性との關係」が『同學』にどのように描寫されているかをテクストに即して読み取り、張愛玲にとつて女學生を書くということ、そこに自らの記憶を重ねることがどんな意味を持っていたのか論じたい。

二、生前未發表原稿と「同學少年都不賤」

まずは『同學』を含む張愛玲の未發表原稿について概観しておく。張愛玲が生前最後に發表したのは、自らが寫った寫眞を含むアルバムに散文を付した『對照記』（一九九四）である。それ以前に張

愛玲は、彼女の傳記を書きたいと言った臺灣の作家、朱西寧に對して「私はこの頃、讀者に與える印象を出来るだけ「沒個性化」——depersonalizedしておきたいのです。(中略)どうか私の傳記は書かないでください」と手紙を送っていた。⁽³⁾張愛玲晩年の「沒個性化」は徹底しており、ほとんど家の外に出ることも、來客に會うこともなかった。その張愛玲が寫眞というもつとも個人的な素材を使つて自身を語つたこの小品が、數多くの「張迷」に熱狂的に迎えられるのも當然であつた。しかし、張愛玲が自分を語つた文章はそれだけではなかつたのである。張愛玲が逝去した後、『同學少年都不賤』、『小團圓』、『異鄉記』⁽⁵⁾、*The Fall of the Pagoda* (雷峰塔)⁽⁶⁾、*The Book of Change* (易經)⁽⁷⁾ (以上出版年度順)といった遺稿が斷續的に發見及び出版され、張愛玲ブームはさらに熱を帯びることになったのである。以下、これらの遺稿につき、推定執筆年代に沿つてまとめておく。

まず、未完の紀行體小説「異鄉記」は、張愛玲が五〇年代初期に親友の鄭文美に對してその存在を告げたものだ。⁽⁸⁾「沈太太」と呼ばれる「私」が、戀人らしき人物を訪ねる旅路にあるという設定は、一九四六年、溫州に潜伏していた胡蘭成を張愛玲が訪ねた時の見聞に基づいていると思しいが、主人公が目的地に到着する前に途切れてしまっている。

次に、一九五七年、イギリスで母が客死した頃から執筆がなされたのが *The Fall of the Pagoda* と *The Book of Change* という二部構成の自傳的長編である。前者では、張愛玲自身をモデルとした少女 Lute (琵琶) が父母の離婚を経験し、やがて父の監禁を振り切つて母と叔母のもとへ身を寄せるまでが描かれている。續編である後者では、なんとか香港留學を果たしたヒロインが學業半ばにして太平洋戰爭を

経験、香港で辛酸を嘗め盡くしたのちに上海へ戻る切符を手に入れるまでで終わっている。この二冊は鄭文美の夫である宋淇への書信から、一九五七年に執筆を開始し、六三年七月には脱稿していたことが分かつてゐる。⁽⁹⁾しかしながら結局この小説を引き受ける出版社は見つからず、張愛玲はひどく落膽することになった。

そして、この二部の小説の内容を中國語にして凝縮し、さらに歸郷後のヒロイン(名前は盛九莉)が文筆活動を始め、對日協力文人との結婚と離婚を経験するまでのくだりを付け加えたのが長編『小團圓』である。前述の英文小説を書き上げたすぐ後に執筆を構想し始めたらしいが、一九七五年に全面的な書き直しが始められ、七六年三月に完成原稿が宋淇夫妻に送られている。⁽¹⁰⁾しかし、内容の過激さと、何より漢奸として日本に亡命中の胡蘭成に鹽を送るような敘述に危懼を感じた宋淇の勧めによつて出版は見送られた。さらに一九九二年三月の書信で「『小團圓』は廢棄のこと」という指示がなされていたために、宋淇の子息で張愛玲の遺產執行人である宋以朗氏が出版を決めたときには大きな論争を引き起こした。その経過や是非についてここで論じる餘裕はない。⁽¹¹⁾ただ、*The Fall of the Pagoda* ではヒロインの弟が結核で夭折することと、香港に渡るまでヒロインは學校教育を受けていないという設定になつてゐることを指摘しておきたい。いずれも張愛玲の傳記的事實とは異なる點だが、『小團圓』では事實通りに變更された。英語圏の讀者に向けて書かれた二部の英文小説より、『小團圓』のほうがより傳記的事實に近いということになる。

さて、『同學少年都不賤』は、ほぼ『小團圓』と同じ頃に執筆されたいらしい。「キッシンジャー國務長官」という記述があることから一九七三年以降であることは間違いない。また一九七八年八月二十日、

夏志清宛の書信に「同學少年都不賤」という小説については、外界から壓力がかかった以外に、自分で送ったあとすぐに缺點だらけであることがわかったのもう放置しています」という記述があることから、この時点ではすでに完成していたことがわかる。

あらずじは以下の通り。舞臺は一九三〇年代、上海のカトリック女子校。上海語も北京語も上手く話せず、容姿にも自信がない趙珏は、恩娟と仲のよい友達になる。趙珏は二つ上の先輩赫素容に密かな思いをよせており、恩娟は同級生の芷琪に好意を持っていた。卒業後、北京の大學へ進學するという素容に、趙珏は思い切つて高價な銀の花瓶を贈る。上京後の素容から親しみを込めた手紙を受け取つた趙珏は初め有頂天になるが、すぐに女學校時代から素容が左傾化していたことを思い出す。素封家の娘である趙珏は、政治運動の金づるとして自分が利用されようとしているのだろうと考えて素容への連絡を斷つ。卒業後、趙珏は親の決めた結婚を拒んで父に監禁され、重い病氣にかかつてしまった。結局母の援助によつて一年遅れて恩娟と同じカトリック系の大學に入るものの、戦争のために卒業できず、そのまま家を離れて擔ぎ屋として自活する。上海―北京を往還する仕事をしながら、大陸を放浪していた朝鮮人の崔相逸と關係を持つが、妻ある彼に裏切られ、人民共和國建國後ほどなくアメリカへ渡る。アメリカでは中國語教師の萱望と同居するが、彼は學生らと浮氣を繰り返し、最終的には彼女を置いて大陸へ歸ることになる。朝鮮語の通譯としてなんとか自活しようとする趙珏だが、大使館に勤める司徒華に足下を見られて性的ないやがらせをされた擧げ句仕事を干され、孤獨で困窮した生活を送っている。一方大學卒業後の恩娟は同窓のユダヤ人と結婚し、趙珏よりも前に渡米していた。思わぬことに夫が政治家として頭角を表

女學生だったわたし

し、恩娟は彼の入閣とともにトップレディの座にのぼりつめる。昔の親友に落ちぶれた自分を見せたくないと思つていた趙珏だが、仕事の口を頼めるかもしれないと考え、萱望と暮らしていたボストンのアパートを立ち退く前に恩娟を招く。ところが久しぶりに再會した二人の話は全くかみあわず、二人はもはや自分たちは友達には戻れないこと、今後一度と會わないであろうことを豫感しつつ別れる。その後大統領と共に『タイムズ』のグラビアページに収まる恩娟の寫眞を見て、趙珏は何とも言えぬ苦い思いを噛み締めるのだった。

物語は三人稱だが、敘事はすべて趙珏を視點人物とする。また物語内容は趙珏の回想にしたがつて錯綜しており、三十年代から六十年代までのさまざまな情景がシャッフルされている。

さて、以上に擧げた五編は全て張愛玲の没後に發見、出版された小説だが、これらの小説からは上海時代の作品にはなかつた二つの特徴を見ることができるといえる。

明らかな特徴の第一は、物語内容（テキストの中の出來事）と物語行為（語り手が物語内容を話す順序）が不協和となる、いわゆる錯時法がしばしば用いられているところである。『傳奇』にも回想場面が多々登場するが、讀者が道に迷うような挿入はほぼ皆無であった。ところが『同學』を含めた上記の小説では、しばしば語り手の意識の飛躍によつて物語は脈絡なく途絶し、讀者は混亂させられてしまう。こうした、いわば讀者に不親切な敘事は、恐らく作者の回想の方式と緊密な關係を持つているのだろう。

上海時代の小説と異なるもう一つの特徴は、ストーリーが張愛玲自身の傳記的事實と多く重なっていることである。上海時代には、張愛玲は自分自身のことを散文に書いてはいたが、小説の中に自分自身（と

すぐに讀者が判斷できる人物)を登場させることはなかった。しかし上記の小説は全て一見して張愛玲自身をモデルにしたとわかるものばかりだ。しかも前述のように、最晩年の張愛玲は、寫眞を付した自身自身の記録を『對照記』という形で出版しているのである。讀者につきまとわれることを極端に忌んだ張愛玲が、このように自分自身の物語を書き續けたのはなぜだろうか。

張愛玲自身は、親友の鄺文美にあてた手紙で次のように語っている。「少數の、自分で書かなければならない(たとえば旅行の時に書いた「異郷記」がそうです)と思つた作品以外は、みんな仕方なく書いたものです。そして私が本當に書きたいものは、いつも大多數の人は讀みたがらないのです。」

また『小團圓』についても、宋淇と鄺文美夫妻に宛てた手紙に「ずっと書きたいと思つていた」「過去のこと」であると説明されている。張愛玲が「誰にもわかつてもらえなくても」「自分の過去について書きたい」と考えていたという傍證として、五〇年代に書きおこされた小説「浮花浪蕊」を擧げておこう。これは五〇年代初期に上海を脱出、廣州を経て香港から日本へ向かうフェリーに乗り込んだヒロインが、來し方をあれこれ回想するという中編だ。張愛玲はこの小説について「中にはいろいろ自傳的な素材を盛り込んでいたので、ヒロインの性格は私に似ています」と語っている。七〇年代の張愛玲は、虚構の度合いに差こそあれ、自分の過去を概括し、印象にのこる情景を取り出してはそこに肉付けをするという形で、過去の記憶を作品化する作業を行つていたようだ。池上貞子は「浮花浪蕊」にあふれる「體驗者のみがついてくる感覚」に注目し、「作者は自分の人生行程のひだに埋まつていたこれらを、陽の當たる場所に並べ直しているかのよう

だ」と述べている。⁽¹⁷⁾『同學』もまた、このような「並べ直し作業」の延長にあると考えていいだろう。

では、女學生を描くことは、そして女學生だった自分を回顧することとはどのような意義を持つていたのだろうか。まずは民國期文學において、女學生とはいかなる存在だったのかというところから考えてみたい。

三、女學生敘事の系譜

「女學生」とは、言うまでもなく近代女子教育が始まつたのちに生まれた存在である。中國では五四新文化運動後に様々な女子學生が描かれてきた。その新しさは彼女が受けた教育だけにあるのではない。生家から半歩足を踏み出しながら、まだ婚家を持たないモラトリアム期に在るという点において、傳統的な女性とは全く違う存在であつた。また前近代において、少女たちのネットワークは「家」の存在抜きには語れなかつたが、女學校は、血縁のない同世代の少女たちが集團生活を送る場でもあつた。同じ學校で學ぶということは、同じような階層に生まれ、同じような教養を持つていることを期待される(上海語も北京語も喋れず、「人力車夫の言葉」である江北話の話者であつた趙珏に友人ができなかつたということは、それだけ他の女學生が均質化されていたことを意味するだろう)。

本田和子は、「明治の女學生」とは、單なる「女子」の「學生」であることを超えた、獨特の陰影に限どられた「女學生的なるもの」であつたと言う。⁽¹⁸⁾職業には直接結びついていない(働くという進路は曖昧に閉ざされている)高等女學校は、「女學生」を具體的な未來から切り離し、幼女と人妻の間の時間を生きる宙づりの存在にした。その枠組

みは民國期の女學生にもほぼ當てはまるだろう。彼女たちは自分たちの未來に樂觀的であつたかと思えば急に絶望し、しばしば不用意に自死を選ぶ。また彼女たちは家長に與えられた嫁ぎ先に果敢に抵抗してみせたかと思うと、箸にも棒にもひつかからないような男に易々と自分のすべてを與えてしまう。こうした不安定な女學生は、純粹で崇高な精神的戀愛を謳い上げた馮沅君に始まり、⁽¹⁹⁾ 黃廬隱、凌叔華といった女學校出身の作家によつて脈々と描かれてきた。以下、これらの「女學生敘事」に登場するヒロインに共通する特徴をいくつか擧げてみよう。もちろんこれは現實世界における女學生の必要條件ではなく、フィクションとしての女學生に付與されるイメージである。

(一) 近代的教育を受けている。五四以降の新思想の洗禮（たとえば自由戀愛の肯定）を受け、それを内在化している女性。

(二) 成熟した、妊娠可能な身體を持つてゐる。後述するように、在學中に第二次性徴を迎える少女たちにとっては、自分の性をいかに行使するかということが大きな問題となつた。

(三) 安定したモノガミック（排他的な一對一對應の）な戀愛關係を結んではない。先ほど引用した議論の通り、女學生は「宙吊り」にされた存在として意識されている。女學生敘事の女學生は、精神面でも身體面でも安定した歸屬先を持つていない。

(四) 自分の將來は自分で決め（られ）るべきものという理想を持つてゐる。(一)と關連するが、新思想を學んだ女學生は、家長の決めた婚姻に逆らい、自分の結婚や職業を自分で決めようとする（そしてその試みはしばしば挫折する）。

女學生だったわたし

つまり「女學生敘事」とは、近代教育を受けてはいるが（受けているがゆえに）、自分の頭腦と身體をどう行使するか決めかねている、極めて危うい少女たちを描くものだと言えるだろう。

さて、このような系譜を前提としながら、『同學』を「女學生敘事」の一つの典型として検討してみよう。張愛玲によつて民國期の女學生はどのように記憶され、再構築されていったのだろうか。

四 女子校という空間

教師や同窓生の回想によれば、瘦せぎすで、パーマもあてずに流行遅れの服を着ていた張愛玲は、無表情で目立たない存在であつたという。しかしだからといって、張愛玲が六年間を過ごした女子空間に無關心だつたということとはできない。【圖】は張愛玲が卒業時に聖マ



リア女子校の文集『鳳藻』一七號に寄せた作品⁽²¹⁾、Prophecies of a Fortunetellerというタイトルの真ん中に水晶玉を抱えた張愛玲自身の寫眞を配している。全四ページ、計三十三人の同級生の顔寫眞が集められていて、首から下には彼女たちの未來像を意匠をこらしたイラストによって示し、英文で短い祝福の辭を添えたものだ。モデルになった一人で「將來のイタリア大使」として描かれた顧淑琪氏の回想によれば、卒業前に張愛玲が同級生三十五人ひとりひとりに寫眞をくれるよう申し入れ、その願いに應じた三十三人がこの「作品」のモデルとなつて文集を飾つたのだという。張愛玲は口數が少なく目立たない存在だったというが、このイラストは彼女の過ごした女學校生活への愛着を示す一例だと言えるだろう。

また、同じく『鳳藻』一二號（一九三三）に掲載された「不幸的她」⁽²²⁾にも注目しておきたい。この短編は今見ることができる張愛玲最初の小説で、海邊の街に育つた仲の良い二人の少女の交流と別離を描いている。家出した主人公が久しぶりに昔の仲良しを訪ねるのだが、彼女の幸せそうな生活を見るのに耐えられず、もう二度と會わないことを決意して再び故郷を離れていくというストーリーだ。廬隱『海濱故人』（一九二五）の縮小版といった趣であり、習作の域を出るものではない。だが、親しかつた女ともだちが久しぶりに再會したものの埋められない溝を感じ、永遠に袂を分かつというストーリーは、四十年後に書かれる『同學』で繰り返されることになる。

しかしこのデビュー作以降、張愛玲の上海時代の小説にはこのような女同士の連帯はほとんど描かれず、ヒロインたちはみな孤立無援で男性社會に對峙させられることになった。四〇年代の張愛玲にとって、女學生同士の友情とは散文の材料として適當ではあつても、小説の主

要なテーマになりうるとは感じられなかったのかもしれない。七〇年代半ばの『同學』によつて、ようやく上海の女學校生活が小説として昇華されることになったのである。そしてそれは、前述したように張愛玲の「自分の過去を書きたい」という衝動——五〇年代の「異郷記」に始まり、『小團圓』で頂點を迎え、『對照記』で締めくくられた——と無縁ではなかつたろう。

五、屈託ない笑い

では、その學生生活とはいかなるものだったのだろうか。『同學』の物語内容は趙珏たちが女子校に入學した一九三〇年頃から始まるが、彼女たちの寮生活は、張愛玲作品には稀な天真爛漫な笑いに満ちている。印象的な場面を掲げてみよう。

その年彼女たちは一二歳で、趙珏はローレルとハーディの映畫に出てくる脇役に熱を上げていた。（略）テナーの歌聲が耳に充ちるようで、初めて心を搖さぶられる思いを味わつたのだった。「あんたのあのデニス・キングつて、口を開けて笑つたことがないわよね。きつと齒が綠色なのよ」と恩娟は言つた。

それから、ルームメイトはみんな彼を「綠の齒」と呼ぶようになってしまった。

寮は四人一部屋で、消燈前、ベッドに入つた後が一番にぎやかな時間だった。恩娟は蚊帳に入りこんでから、枕の上で兩腕を掲げ、ぐるぐるねじりながら踊るのが得意だった。骨がないようにしなやかな、中東のエロチックなダンスを真似たもので、自分で「玉の腕のわざわい」と呼んでいた。趙珏は笑つてベッドの上を

轉げ回った。(略)

一人一人に憧れのスターがいて、誰かがこの名前を口にしようものなら、すぐに金切り聲を上げてベッドの上に寝轉がり、ひとしきり飛び跳ねるのだった。

デニス・キング (Dennis King) はイギリスのオペラ歌手で、ここに登場する映画はフランスのオペラに基づいて改編された「Era Diavolo (快賊ディアボロ)」(一九三三)である。スターにうつとりする少女をルームメイトみんなが茶化したり、自分のお氣に入りのスターの名前が呼ばれると金切り聲を上げて轉げ回ったりというのは、憧れているアイドルについて熱を込めて語り合う現代の少女とあまり變らない。また恩娟の「藝」が、箸の轉げるのもおかしい年頃の少女たちを抱腹絶倒させる描寫は、屈託ない少女たちがはしゃぎ回る光景をリアルに切り取っている。

「轉げ回って笑った」という表現は、上海時代の散文『私語』に書かれた「母と太った伯母が、ピアノ椅子に腰掛けて映画のラブシーンを演じているのを、私は床に座ってみていたが、大笑いして狼皮の敷物の上を轉げ回った」という描寫に重なるものだ(ほぼ同じ情景が『小團圓』にも描かれている)。全體に暗い色調に染められた『私語』というテクストの中で、ひととき印象的な明るい情景なのだが、『同學』の中でもこのシーンは同じ役割を果たしている。少女間の氣の置けなおしやべりと他愛ないパフォーマンスを、視點人物である主人公は心の底から楽しみ、普段の冷靜な様子に似合わず「轉げ回って」笑うのだ。卒業後の長い年月、趙珏は「玉の腕のわざわい」を懐かしく思い出すことになる。

女學生だったわたし

またふざけ合うだけではなく、趙珏は恩娟の歌を高く評價していた。

恩娟の聲はそう高くなかったが、歌聲はよく響いて綺麗だった。アルトのパートで「人生の美しき祕密よ」や「インディアン・ラヴ・コール」を歌うのを聞くと、趙珏は背筋がぞくぞくして、きつと彼女は海外でも成功できるだろうと深く信じた。

恩娟が歌ったのはそれぞれ Naughty Marietta (浮かれ姫君、一九三五)、Rose Marie (ローズ・マリイ、一九三六) という映画の主題歌である。夏志清はこの二曲が中國でも大變流行しており、「當時の中國では中學生でもみなインディアン・ラヴ・コールを歌えた」と述べた上で、この小説が「自分の中高時代のために眞實の記録を残そうとしたのだろう」と論じている。これらの映画や音楽の挿入によって、三〇年代の女學生たちの娛樂が端的に傳わつてくると同時に、趙珏たちの交情も更なるリアリティを持つて迫ってくる。それは夏志清の言う通り、張愛玲が「眞實の記録を残そう」として記憶から呼び起こしたディテールだったのだろう。そして、女學校生活の「眞實の記録」の核心には、身體と性への目覺めがあった。

六、乳房への視線

『同學』テクストの描寫の中で最も論議を呼んだのは、女子學生たちが性や肉體に寄せる好奇心が生々しく描かれているところと、女子校内での同性愛的な傾向である。特に乳房については、登場する同級生のほとんどすべてに觀察が及んでいると言っている。親友の恩娟は「全然瘦せない上に、豐滿な乳房も加わって、中年女性の體型そのま

まだった、恩娟が心を寄せている芷琪は「胸の曲線の位置は比較的低い、しつかりしている」、趙珏のあこがれの素容は「少し男の子のようだったが」、「しつかりした重みのある乳房の線が浮き出ている」というように。

しかし胸が女性美の象徴となつたのは、それほど古いことではない。前近代の、胸を束縛してできるだけ目立たないようにする「束胸」という風習に對して、初めて攻撃を挑んだのは「性博士」張競生（一八八八—一九七〇）であつた。一九二四年、張競生は「いつのまにこの自然に反し、衛生に反する束胸などというものができたのかわからないが、纏足や腰の締め付け、頭の締め付けなどの諸悪とともに放棄すべきだ。女性に大きな胸があるのはごく自然なことで、何を恥ずかしがることがあるだろう。それに何と言つても乳房が胸の前に突き出ているのは、確かに女性の美しさの象徴なのだ」と述べている。張競生はさらにその二年後、性のめざめについてのさまざまなレポートを集めた『性史』（一九二六）を出版して大きな波紋を呼んだ。

『同學』ではこの『性史』を讀破していた趙珏が、恩娟に性について尋ねられるものの、どうにも答えられず、八卦のような圖を描いてごまかす場面が書かれている。早熟な少女にとって、潤色されていない生の性的經驗が綴られた『性史』は格好の教科書だつたに違いない。

二〇年代の中頃から、文學テクストの中にも「胸の曲線」が現れ始める。『性史』と同じ年に發表された凌叔華の短編『說有這麼回事』は、學生演劇でロミオとジュリエットを演じた二人の女子學生が役柄通りに戀に落ちるさまを描くが、そこでは同性に戀し、彼女の胸の曲線を意識する少女のときめきが描かれている。「影曼は笑いながら雲羅のそばにやつてきた。彼女のはだけた襟から、白い玉のような胸元と、

襟元にそつて柔らかな、微かに膨らんだ乳房の曲線が見え隠れするのを目にした」。

二七年には魯迅が散文「天乳を憂う」で、廣東の天乳運動（胸を束縛から解放する運動）に觸れている。ちなみに、『婦女雜誌』が最初に束胸の害について警告しているのは一九一七年のことであり、二〇年代にもいくつかの記事が胸を縛ることの弊害を指摘している。たとえば一九二七年第十三卷「論婦女縛胸的謬誤」（署名夏克培）では、胸の骨格を損ない、母乳が出なくなる危険があるとして胸を解放すること強くすすめている。この記事が、處女崇拜の氣風が平たい胸を尊ぶ風潮を生んでいるとして、「胸を縛つて處女に見せかけるのは娼婦の狡猾な技である。（中略）良家の主婦は處女のふりをする必要もないし、處女のふりをするにしても縛る必要はないのだ（處女も時期がくれば發達するのである）」と勸めているのが興味深い。この時代、女性の胸の曲線とは、張競生が言うような「女性の美しさの象徴」ではなく、より多く「淫亂」を連想させる記號として機能していたのだろう。だからこそ、繰り返し胸の大小と貞潔は無關係であるという記事が載せられなければならないかつたのだ。

それを裏付けるように、『同學』には、以下のような描寫が見える。

芷琪にピアノを教えている李小姐はとても活潑な人で、既婚の廣東人だつた。胸は十分に發達していたものの、成熟しすぎていて、またブラジャーもつけていなかったたので、垂れ下がった袋のようにしか見えない。

「男に引き延ばされたのよ。」と芷琪は言つた。

この露骨な臺詞は、小説の終盤、趙珏がかつての偶像であつた赫素容に會つた場面でも繰り返される。

戦後、彼女はジェスフィールド公園で赫素容に出くわした。一人で乳母車を押し、青みがかった白い旗袍を着ていた——この前最後に會つた時にも白を着ていた——縁なしの眼鏡をかけていたが、やはり以前とかわりない。髪型もまだショートだったが、ただ乳房がずつと大きくなり、位置も低くなつていた。芷琪の言つた、當時は耐えられないほど俗だと思つた言葉がよみがえつてきた——「男に引き延ばされたのよ。」

かなり距離があつたので聲をかけはしなかつたが、彼女は赫素容も自分に氣がついてるとわかつていた。彼女は全く無關心だつた。(中略)男と戀愛をしてようやく綺麗さつぱりと、跡形もなく洗い流すことができたのだ。⁽³⁵⁾

『婦女雜誌』の記事がわざわざ「胸を縛つて處女のふりをする必要はない」と言うのは、『同學』のこの臺詞が示しているように、「大きな胸」とは「男性との交渉によるもの」であり、「胸を縛らなければ性的にだらしない女と見られる」という意識があつたからに他ならない。現在のような胸を包むこむタイプの下着が三十年代中頃に普及するまで、女學生たちは従來の「束胸」用の布を巻き付けることはやめたものの、同じ効果を狙つた小さなベスト(小背心)を着用していた⁽³⁶⁾。張愛玲が女學校で寮生活を送つていたのは、ちょうど束胸禁止運動が普及し、近代的な下着が廣がり始めた頃のことだつた。かつての「天足」や「斷髮」がそうであつたように、胸のラインがその女

女學生だつたわたし

性の「進歩度」をはかる尺度となつていた時代ともいえる。ただ「胸の大きさ」が髪や足と決定的に異なるのは、その曲線が男性との性的接觸を容易に連想させることであつた。しかし戦後になつて、赤ん坊を連れ、胸を「男に引き延ばされた」素容(在學時なら堪え難い想像である)と出會つた趙珏は、全く動搖しない。そして十代の頃、あれほど戀いこがれていた素容に無關心でいられたのは、自分自身も異性と戀愛をしてようやく素容への想いを跡形もなく洗い流すことができたからだ、と考えるのである。

當時女子學生同士の、特に宿舍での同性愛的傾向は珍しいことではなかつた。ちょうど張愛玲が聖マリア女子中に在學していた一九三六年、カトリック系の上海の雜誌『女青年』に掲載された「女朋友」⁽³⁷⁾という記事は、當時の一般的な見方を代表している。「女ともだちの間に不幸にして、不自然な、邪淫に近い性の關係が存在することがある。こういう事は非常によくあることで、今やおおっぱらにされている⁽³⁸⁾」と珍しいものではないことを認めた上で、「少數の不正常な人間が、まだ成長し切つていない青年の情感をひきつけ、正常な人生を送れないようにし、生命に對して貢獻できないようにしてしまうことは、何と言つても有害なことだ⁽³⁹⁾」と斷じている。ではどうすればいいのか。大多數の少女たちは、性的衝動に突き動かされるまゝに「異性の友人と交際するようになれば、多くの少女や若妻たちの濃厚な友情は自然に正常な軌道にもどり、それぞれ幸せな結婚をするだろう⁽⁴⁰⁾」という豫防策が提示されるのだ。同性同士の戀愛感情とは「正常な感情」異性愛⁽⁴¹⁾が芽生える前の兒戲的な感情であり、深みにはまる前に「正しく」異性と交際すれば「治療できる」、という認識である。『同學』の敘事は、見たところこの雜誌記事と價值觀を同じくしていると言えよう。

しかし、趙珪の回想は必ずしもその價值觀と合致していない。以下、更にテクストに即して趙珪のゆらぎを追うことにする。

七、描寫のねじれ

七十年代のアメリカで再會した時、まだ芷琪に戀々としているらしい恩娟を見て趙珪は愕然とする。

まさか、恩娟は一生戀愛をしたことがないのだろうか？

そうだ。彼女は夫に不實な人ではない。

趙珪は、思わずケネディ大統領暗殺のニュースを聞いた日のことを思い出した。午後一時頃にラジオが大統領が狙撃されたと言い、二時か三時頃には亡くなったと聞いたのだ。彼女はちょうど流しで皿を洗っていたが、脳では自分の聲がこう言うのを聞いていた。

「ケネディは死んだが、私は生きている。皿を洗っているにすぎないけれど。」

もつとも原始的な慰めだ。さらさらした手による慰めは、いくらかもしどかしく、ほとんど感じる事ができないほどだった。しかしやはり心まで届いた、なぜならそれは眞實の言葉だったから。

趙珪は、異性と戀愛をすれば同性への思慕は消し去られるはずだという『女青年』式の常識に立ち、芷琪への感情を保ち續けている恩娟は「夫を愛していないのだ」と考える。その思考が順當かどうかはここでは措くが、ともかく趙珪は、異性との「正常な愛」を経験してい

ない恩娟に比べれば、まだ自分のほうがまだ、と自分に言い聞かせているのである。「殺されたケネディ」よりも「生きていて皿を洗う私」が恵まれているのと同じように、「閣僚夫人だが同性愛を卒業できない恩娟」より「孤獨ではあつても異性愛を経験した自分」のほうがまだ、というわけだ。

周芬伶はこの描寫を引用して、「趙珪は同性を愛するのは本當の戀愛とは認めておらず、どれほど堪え難いものでも異性愛こそが愛の完成型だと考えている。彼女（張愛玲＝引用者注）は同性愛というテーマを處理することはできたけれども、やはり同性愛、もしくは両性愛の作家とは違うのだ」と述べている。確かに、少なくとも敘事レベルにおいて、成年後の趙珪は自分が異性愛者であることを疑つてはいない。しかし描寫のレベルで作品を精讀すると、必ずしも趙珪の自己認識を鵜呑みにしてよいのかという疑いが生じてくるのである。以下、趙珪が愛する人をどんなまなざしで見ているのか、それぞれ見てみよう。

趙珪の異性の戀人は、戰爭中に知り合つた既婚の朝鮮人崔相逸と、米國の大學で中國語教師をしている萱望である。しかし、彼らの行爲や臺詞が語られても、様子や衣服は愚か、表情についてすらほとんど描寫はなされない。

最初の戀人である崔相逸は、以下のように恩娟との會話の中で觸れられるのみである。

趙珪は笑つて、「崔相逸のことはね、全く中世風のロマン主義だったわ。彼のいろんなこと、私は知りたくもなかったのよ。」
恩娟もなにげなさそうに聞いた。「結婚していたの？」「朝鮮でね。」
しばらくすると笑つて、「わたし、感情には目的なんてなくてい

いし、結果が必要とも限らないとも思っているの。」恩娟は笑って「いろいろこだわりがあるのねえ。」ちようどそこに叔母が入ってきたので、二人とも心からほつとした。⁽⁴⁾

崔相逸は終わつた戀の相手として會話の中に登場するだけで、彼が不實であつた以外にはどんな男性であつたかは全く語られない。ここでは、彼の「いろんなこと（不實な部分）」について趙珪自身知りたいと思わずに、何の見返りも求めず彼を愛していたということと、そうした愛について恩娟が全く理解を示さず、むしろ輕蔑の念を抱いているようであることが語られている。

では、アメリカで同棲していた萱望はどうだろうか。彼については以下のように描寫される。

萱望は小柄で整つた顔立ちをしており、もともと四十を越しているようには見えなかったし、アメリカ人はいつも東洋人の年は分らないという。彼は英語の發音がよくないのでいつも黙りを決め込んでいた。このように纖細で神祕的な東洋人は、小さな街ではなおさら不思議な存在だつた。⁽⁴⁾

この纖細で神祕的に見える萱望もまた、崔相逸と同じように趙珪を裏切る。

趙珪は車のドアについたポケットの中に、ナイロンのピキニ型の下着を見つけてしまった。透明で、小さな青い花が刺繡されている——よりによつてわすれな草だ。それなのに履くのを忘れて

女學生だつたわたし

いったとは。

それからは車にのると吐き氣がするようになった。

「あつちはどうとも思つてないし、こつちもどうとも思つてないんだ。君ひとり眞に受けてどうするつもり？」と彼は言つた。言外の意は、郷に入れば郷に従え、うまい汁を吸えるうちに吸わないのはバカだ、というわけだ。

そのあとがあのシンディだつた。

人は生まれながらの多妻主義でもあり、生まれながらの一夫一婦主義でもある。

よしんば彼女が耐えられたとしても、全ては變化し、以前とは異なつてしまつた。⁽⁴⁾

「あのシンディ」とはここにしか登場せず、いかなる人物なのかは全く説明がなされない。ともかく萱望は最終的に大陸に歸ることを選ぶが、趙珪は彼のその選擇は彼女から逃げるためだろうと考える。そして萱望がどんな人物であつたかという手がかりはほとんど與えられないままだ。

では、同性である赫素容についてはどうだろう。まず小説に登場する場面を挙げる。

校内にバスケットボールのキャプテンで、外部から招くゲストよりも講演がうまい人物がいた。旗人で名前は赫素容、趙珪より學年は二つ上で、北京語が正しく美しいのは言うに及ばず、話す態度がすばらしく自然だつた。手振りを交えなくても悲憤慷慨の

力に満ち、講堂の舞臺の端に立つて、演臺もなければ原稿もなしに、はすにたつて軽く頭を下げ、首をややかして、片手を僅かに後ろにひいているところだけに少しの緊張を見せている。それは一種陰鬱に聴衆を威嚇している姿勢のようにも見えた。まろい青白いほほに、大きなややつりあがつた目、短髪は耳の邊りで揃えられ、額の上を斜めによぎっている。男の子のようで、かなり背が高かったが、茶色の絹のブラウスのえりをくつろげて、しっかりした重みのある乳房の線を露にしていた。

趙珪は「赫素容赫素容赫素容赫素容」と一枚の紙いっばいに書いた。まるで外國人の先生がしよっちゅうお仕置きとして單語を百回書かせるように。左手で隠しながら書いたのだが、誰かに見られることを恐れもし、また誰かに見られたくてたまらなくもあつた。

赫素容に對するまなざしが、今までに擧げた異性へのそれとは全く違うことは一目瞭然である。疊み掛けるような行文からは趙珪の興奮がうかがえるようだ。ここでの赫素容は、特技、出自、話し方、姿勢、容貌、髪型、體格、服裝と細かく描寫されていて、立體的で生氣に溢れ、ありありと目の前に浮かんでくるようである。つまり、趙珪の回想は、明らかに「綺麗さっぱり忘れた」はずの赫素容を語る時になつて俄然精彩を帯びてくるのだ。それだけでなく、彼女に戀する趙珪のつたやや偏執的な行動も語られる。名前を何度も書くだけでなく、彼女の觸れたものに近づきたい、觸りたいというフェティッシュな欲望に基づいたものだ。

ある日、彼女はあの茶色のブラウスが宿舍の廊下に掛けて干してあるのを見た。メリヤス編みの、細かくちりばめられた葡萄の模様に見覚えがある。邊りには誰もおらず、彼女はそつと片方の袖口をひきよせると、頬にあて、しばらく思いを込めた。

目的のある愛はみな本當の愛ではない、と彼女は思つた。戀愛、結婚をする年齢になつて、自分のことを考えて、あるいは家庭や社會のために子孫を残そうとするなんて、それは愛情ではない。

趙珪は赫素容と同じ時間に食堂にいると思うだけでも胸が張り裂けるような氣持ちになり、トイレから彼女が出てきたのを見ればこつそりとその便座に腰をおろす。しかしこのような甘く切ない想いは、男性との關係では全く語られないのだ。つまり『同學』という小説は、敘事のレベルでは異性愛こそが戀愛の完成型であると斷言しているのに、描寫のレベルでは主人公の愛情は同性に對してのみ注がれているのである。このねじれをどのように考えればよいのだろう。異性との戀愛經驗は、あまりにも辛く生々しい記憶なので封印されていた、ということなのだろうか。或いは、不實な戀人との關係についてはほぼ同じ頃に執筆されたより自傳的な要素の強い『小團圓』において展開されているので、『同學』では繰り返さなかつたということなのだろうか。しかしいづれにしても、趙珪の異性愛主義的な價值觀を鵜呑みにし、他ならぬ趙珪自身が赫素容に向けるひたむきなまなざしと行動が表象しているものを見逃してしまうわけにはいくまい。趙珪自身の敘述（異性と「正常な」戀愛をすれば同性のことはさっぱり忘れてしまう）に従つて趙珪と恩娟を「正常な」異性愛者／「未熟な」異性愛者というように分類してしまうと、この小説の大半を占めている女學生敘事

の魅力を見逃してしまう危険があるのではないか。趙珪と恩娟に限らず、女學生のセクシュアリティは異性愛／同性愛の二項に綺麗に分けられるものではないのだ。趙珪が所與のものとして標榜する異性愛主義は、同じ趙珪の記憶の中に蘇る自らのまなざしによって、すでに搖るがされているのである。

八、まとめー回想という悦樂ー

フラン・マーティン (Fran Martin) は、二〇世紀の中國語圈における女學生の同性愛的敘事は常に「回想の形式」(memorial mode)と切り離せないと述べている。本論二節で女學生敘事とは「近代教育を受けてはいるが(受けているがゆえに)、自分の頭脳と身體をどう行使するか決めかねている、極めて危うい少女たちを描くものだ」と述べたが、たとえ同性愛を扱わなくても、女學生敘事は回想の形式に強い親和性を持つている。居室での天真爛漫なふざけ合いも、同級生の身體への意識も、先輩への激しい憧れも、女子校(寮)という空間があつてこそ許されることなのだ。卒業とともにこの空間を追われてしまえば、たとえ顔を合わせることがあつてももう二度と屈託ない友達同士に戻ることはできない。恩娟のように人妻の隊列に否應なく組み込まれてしまうか、趙珪のようにその隊列を拒んで「落伍者」とみなされてしまうかである。卒業後數十年を過ぎ、もはや出發點に戻ることでできない年齢になつてからの同窓生との再會は、均質な存在であることを期待されていた「女學生だったわたし」を否應なく振り返させられるきっかけとなる。それは好む好まざるに關わらず、十代の理想、歡笑、痛みがその後の自分をどう形作つたのかを檢證する作業となるはずだ。

先述したように、上海文壇を風靡した四〇年代、張愛玲は女子學生ヒロインを幾人か描いたものの、彼女たちは同性との連帶を持つことのない孤立無援の存在であつた。たとえばデビュー作『沉香屑 第一爐香』の主人公葛薇龍は香港の高校生という設定だが、彼女の同級生は一人として登場しない。また薇龍の美貌は諸刃の劍であり、異性をひきつけると同時に彼女自身を墮落させることになるという設定だったが、作中薇龍の容貌は細かく書き込まれていたものの、身體についての描寫はほとんど見られず、また性についての描寫も注意深く避けられていた。ところが七〇年代以降に書かれた、自傳的色彩が強いと思われる『浮花浪蕊』、『同學』そして『小團圓』などには、性を見つめ、身體を凝視する描寫が表れているのだ。張愛玲が自らの「性」を昇華させた作品としてはまず『小團圓』を擧げるべきであろうが、作者自身がモデルであると思われる少女が「性」という難事に向き合う姿は、『同學』でも共通しているといえよう。『小團圓』でも『同學』でも、ヒロインは自分が美貌とは無縁であり、周圍に對して吸引力を持つていないことを痛感している。そして性的魅力に缺けているという自覺は、異性との關わり合いの中ではなく、母や同級生という同性との關係の中で生じた疎外感によつていふという點は注目に値しよう。こうした作者自身を映したヒロインが上海時代には描かれなかったのは、張愛玲自身が内核に抱えていた傷が深かつたためではないか。そしてその傷を「どうしても書かなくてはならない」と考えるようになるために、三十年近い時間が必要だつたということではないだろうか。

『同學』の趙珪は、女學校というフィルターから脱離した後に性的魅力に乏しい(と思ひこんでいた)自分もまた異性の性的欲望の對象になることを知る。自分が異性に愛される存在となりえるのだ、という

発見は、先に引用した「同性愛から脱しきれない未熟な恩娼」に對する優越感として機能するものの、その異性愛は更に彼女自身を傷つけ、孤獨にするものに他ならなかった。だからこそ、女學生時代、同性へ感じた純粹な愛情は、描寫レベルでは燦然とした輝きを失わないでいるのだろう。

『同學』では表面を撫でるようにだけ描寫されたヒロインの異性と愛と性は、『小團圓』では正面から見据えられている。『小團圓』が「家」を中心とした回想であるとしたら、『同學』は『小團圓』の補足として、『學校／友達』を中心として織りなされた回想として讀める。民國期、女學生だった少女たちがその後どのような生(性)を餘儀なくされたのか、『同學』は重要な参考書として讀まれうるのではないだろうか。

注

- (1) 臺北・皇冠出版社、二〇〇四年。
- (2) 季進「對優美作品的發現與批評——夏志清訪談錄」王德威主編『中國現代小說的史與學』臺北・聯經出版社、二〇一〇年、四八三頁。
- (3) 一九七五年に送られた手紙。本文は未公開。朱天文『花憶前身』、臺北・麥田出版社、一九九六年、三二頁。また一九七五年十月十六日の張愛玲より宋淇宛への書信にも「急いで『小團圓』を書いている動機の一つは、朱西寧が胡蘭成の話に基づいて私の傳記を書きたいと言ってきたからで、私は短い返事をしたため、近年はつとめて讀者の私への印象をdepersonalizeしているので書かないで欲しいと言っておきました」と書いてあったという。宋以朗『『小團圓』前言』、張愛玲『小團圓』臺北・皇冠出版社、二〇〇九年、五頁。
- (4) 臺北・皇冠出版社、二〇〇九年。
- (5) 『對照記』臺北・皇冠出版社、二〇一〇年、一一四～一一八頁。
- (6) Eileen Chang, *The Fall of the Pagoda*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 2010.
- (7) Eileen Chang, *The Book of Change*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 2010.
- (8) 宋以朗「關於『異鄉記』、『對照記』」臺北・皇冠出版社、二〇一〇年。
- (9) 宋以朗『雷峰塔』／『易經』引言『雷峰塔』、『易經』ともに臺北・皇冠出版社、二〇一〇年)による。
- (10) 執筆前後の経緯については宋以朗『小團圓』前言(注4『小團圓』所收、三～一七頁)を参照。
- (11) 出版を批判する代表的意見は張小虹「合法盜版」張愛玲 從此永不團圓』『聯合報』二〇〇九年二月二七日で、作者が望まなかった未發表稿の出版は「法に觸れない海賊版」であり、買ったり讀んだり論評したりするべきではないと呼びかけている。傾聴すべき意見だが、筆者は先の英文小説と合わせて張愛玲の自傳的小説が讀めるようになったことはやはり計り知れない價值があると考え。
- (12) 夏志清「張愛玲給我的信件(十)」『聯合文學』第十四卷第九期、一四〇頁。
- (13) 同注8、一一二頁。
- (14) 同注10、五頁。
- (15) 一九七八年十一月、『皇冠』二九三期。『惘然記』臺北・皇冠出版社、一九八三年に所収。
- (16) 夏志清宛、一九七八年八月二十日付の書信。同注12、一四〇頁。
- (17) 池上貞子「張愛玲における時代と文學 一九五〇年代の短篇小説から」張愛玲『愛と生と文學』東京・東方書店、二〇一一年、二四三頁。
- (18) 本田和子『女學生の系譜——彩色される明治』東京・青土社、一九九〇年、一二頁。

- (19) 拙稿「女ともだちのはなし 陳衡哲と凌叔華による女學生の物語」京都・朋友書店『桃の會論集』第三集、二〇〇五年九月を参照。
- (20) 張愛玲の高校時代の恩師、汪宏聲の書いた「記張愛玲」による。初出は『語林』一九四四年二月というが未見。ここでは子通・亦清主編『張愛玲評說六十年』（北京・中國華僑出版社、二〇〇一年）を参照した。また萬燕が張愛玲の同級生、顧淑淇にインタビューをしている。止庵・萬燕著『張愛玲畫話』天津社會科學院出版社、二〇〇三年、一二五～一二八頁。
- (21) この圖は河本美紀氏（長崎ウエスレヤン大學非常勤）が上海市檔案館で複寫したもの（檔號Y8-1-545）を、氏と檔案館の許可を受けて轉載したものである。河本さんの御厚意に感謝申し上げる。
- (22) 『鳳藻』掲載の初出テキストは未見。本論での引用は、陳子善「天才的起步——略談張愛玲的處女作「不幸的她」」『作別張愛玲』上海・文匯出版社、一九九六年に全文轉載されたものによる。
- (23) 同注1、一二～一三頁。
- (24) 『天地』第十期、一九四四年七月、九頁。
- (25) 同注1、一四頁。
- (26) 夏志清「泛論張愛玲的最後遺作」劉紹銘他編『重讀張愛玲』、上海書店出版社、二〇〇五年一月、一六九頁。
- (27) 張競生『美的人生觀』（一九二四）、参照したのは北京・三聯書店、二〇〇九年一月、二二頁。
- (28) 『晨報副刊』第五六期、一九二六年五月、署名素心。本論では凌叔華『花之寺 女人小兒兒倆』北京・人民文學出版社、一九八六年、八四～八五頁を参照した。
- (29) 一九二七年十月八日『語絲』週刊第一五二期、『而已集』所收。
- (30) 董景熙『警告纏胸女子』、一九二七年第三卷第一二期。
- (31) 二八頁。
- (32) 同注1、一六頁。
- (33) 同注1、五八～五九頁。
- (34) 謝黎『チャイナドレスをまとった女性たち』、東京・青弓社、二〇〇四年、八二頁。
- (35) 一九三六年五月二〇日、第十五卷第五期。署名露譯。
- (36) 同注35、九頁。「但是在這些健全的、正常的友誼之中、女朋友間不幸地有一種不自然的近於淫邪的性的關係存在。這種事是很普遍而且是很公開的。」
- (37) 同注35、一六頁。「少數不正常的人、吸引著未長成的青年們的情感、使他們不能有正常的人生、對生命不能有更大的貢獻的行爲、無論如何是有害的、是應當取締的。」
- (38) 同注35、一一頁。「有機會交異性朋友的、大多數的少女和少婦們的濃厚的友誼會自然地走入正軌、她們會很快樂地各自結婚了。」
- (39) 同注1、五九～六〇頁。
- (40) 張欣「怨」に囚われた張愛玲——「同學少年都不賤」の「缺點」をめぐって——『中國研究月報』第六一卷第七號（二〇〇七年七月）は、趙珏の嫉妬が彼女自身の視點を狭くて病的なものにしており、恩娟の結婚生活についての憶測は信賴するに足りないとする。この觀點に筆者も同意するが、ここでは小説内の客觀的事實がどうであつたかよりも、趙珏の目に現實がどう映つていたのかを問題としたい。
- (41) 周芬伶「芳香的祕教 張愛玲與女同書寫」、『印刻文學生活誌』二二號、二〇〇五年五月、七二頁。
- (42) 同注1、三一頁。
- (73) 同注1、四五頁。
- (44) 同注1、四六頁。

- (45) 同注1、一七〇一八頁。
- (46) 同注1、一九頁。
- (47) 敘事と描寫のねじれという問題については、同じ角度から林懷民を讀み解いた三須祐介「クィアな、蟬の、聲——林懷民の「同志小説」を讀む」『未名』二八號、二〇一〇年三月に啓發をうけた。
- (48) Martin, Fran, *Backward Glances: Contemporary Chinese Cultures and the Female Homoerotic Imaginary*, Durham and London: Duke University Press, 2010, p.63.
- (49) 『紫羅蘭』第二〇三期、一九四三年五〇六月。
- (50) 趙珏は、恩娟には自分が「チビでガリガリで青白く、べっこうぶちの眼鏡のつるがちようど瞳を隠していて、向かい合っても眼を見ることができず、何を考えているかわからない（同注1、九頁）」ように見えていると感じている。注40で述べた通り、これは物語内の客觀的事實であるとは限らない。しかし趙珏は一貫して自己肯定感に乏しく、特に卒業後は、恩娟は自分を否定的評價しているに違いないという強迫觀念にとらわれている。

〔付記〕 本論文は、科學研究費補助金（23320073）の助成を得てまとめられたものである。